

交通事故や災害、病気などで親を失った子供を支援する「あしなが育英会」の玉井義臣会長(76)は、東日本大震災の発生2日後に震災遺児への一時金の給付を決めました。素早い決断の背景には、半生の中で体験した「愛する家族を理不尽な事故と病で失った怒りと深い悲しみ」があり…。(飯塚友子)



東日本大震災で親を亡くした遺児らとともに、玉井会長(前列右から2人目)は米ニューヨークで支援をよびかけた—6月9日(あしなが育英会提供)

震災2日後の決断

3月11日、現地事務所の視察に訪れたアフリカ・ウガンダのホテルで、荷ほどきをしながらテレビに目をやった。すると経済市況を映していた画面が、いきなり津波にのみ込まれる日本の光景に切り替わった。家や車、あらゆるものが濁流に押し流されていく。

信じられない思いで手を止めていると、日本から「震災対応を取るため即、帰国を」との電話が入り、事務所立ち寄る間もなく13日に帰国、空港から東京本部に直行した。地震・津波遺児への一時金(50万~100万円)給付を決断。しかも使途自由、返済不要の特別措置だった。

「着の身着のままの人に使用道を定めるのも、返せと言うのもあかんと思う」震災遺児は今、どんなに心細い思いでいるのか。自分だったら何が必要だろう。この当事者意識こそ、半世紀も前の不幸な体験で得たものだった。

母を奪った交通事故

昭和38年12月、母のていさん(享年74)が大阪府池田市の自宅前で、ライトバンにね飛ばされた。加害者は隣家の使用人だった。意識不明に

怒りと悲しみが未来を変える

〈たまい・よしおみ〉昭和10年、大阪府生まれ。滋賀大卒業後、証券会社社員などを経て経済評論家として活動。38年暮れ、母のていさんが車にひかれ、翌年死去したのを機に交通評論家に。40年に「交通犠牲者」(弘文堂)を出版した。44年設立の「交通遺児育英会」では専務理事に。平成5年、支援対象を災害遺児と病気遺児に広げる「あしなが育英会」を立ち上げ、10年から会長に就任した。主な著書に「だから、あしなが運動は素敵だ」(批評社)など。



「『あしなが運動』を始めた原点には、母の『敵討ち』がある」と語る玉井会長(瀧誠四郎撮影)

遺児に冷たい社会

市井の善意で交通遺児の進学を支援する「あしなが運動」から昭和63年に災害遺児、平成元年に病気遺児の進学を支援する制度もスタート。「あしなが育英会」はこれらが統合された形だ。現在は自殺遺児や海外の遺児も支援対象にしている。

元年には妻、由美さん(享年29)をがんで失った。「被害者としては僕、横綱級ですわ」。肉親と別れる苦しみを抱えた子供が、将来の夢すら絶たれてしまったら。この当事者意識が、遺児に冷たい社会を変えようという運動の原動力になっている。

「社会変革は不幸を背負った人間にしかできない。怒り、悲しみ、苦しみが深ければ深いほど、運動は大きくなる」。言い換えれば、死ぬほどつらい体験は、社会を動かす未来を変えるほどの大きな力の源にもなりうるということだろう。

転機。話そう、話しましょう

35

陥った母が亡くなるまでの35日間、必死の思いで看病を続けた。

途中、母の片目が突然開き、じつとこちらを見つめる瞬間があった。「頼むで」。無言で、そう訴えた気がした。思わず「この敵はきつと討った」と声を出していた。事故を通じて分かったの

は、当時の交通事故犠牲者が置かれていた理不尽な立場だ。

昭和30年代は「交通戦争」と言われ、日本の急成長に伴い車両が増えて死亡事故が増した。死者は今の倍以上となる年間1万人を超えた。死因の7割が頭部損傷なのに、脳神経外科の専門医は日本で4病院にしかいなかった。ていさんも満足な治療を受けられなかった。「ほったらかしでポロ雑巾のような死。手術をした医者は「開頭手術は初めて」というし…」

しかも、補償は自賠責保険金(死亡1人30万円(現在は最高3千万円)とあまりにも低かった。補償交渉は難航し、加害者の兄は「(母は高齢者だから事故で)始末してやったんや」との捨てぜりふ

が、現在の活動へと続くきっかけに。後に「あしなが育英会」名誉顧問となる交通遺児の岡嶋信治さん(68)と出会い、44年の「交通遺児育英会」設立に参加。そして、この団体にかかわったことが、平成5年に誕生する「あしなが育英会」につながった。

「被害者としては僕、横綱級ですわ」



—6月には津波遺児とともに米ニューヨークで街頭募金を行い、会見で現状を訴えました  
「米CNNテレビが何回もニュースで流してくれ、ABC(米)やBBC(英)の各局も追随しました。9・11テロの遺児も一緒に募金活動をしてくれました」  
—被災地に義援金がなかなか届かないと伝えられる中、育英会

への寄付が増えているそうですね  
「1日現在、1794人の申請に対し、1758人に計11億2450万円を支給しました。海外大企業からも大口寄付が来ています。今後は、阪神大震災後に遺児の心のケアの活動拠点になった『レインボーハウス』(神戸市)を東北に建てたい。30億円を目標に建設費を集めています。阪神の震災遺児が今、『恩返し』と東北のため奔走しています」